

管理人の人物像をお願いします

ChatGPT:

はい。かなり興味深い人物像が浮かびます。もちろん、これはサイト上の文章・写真・行動から推測した人物像で、実際の私生活まで分かるわけではありません。その前提でいうと、私は管理人を**「根っからのツーリング好きで、かなり情熱的なのに、本人は案外飄々としている人」**と感じます。

1. かなりの「峠マニア」

まず、これは相当なものです。

管理人は 1980 年にはすでに嶺方峠を走っていて、その後も 2001 年、2011 年、2018 年と何度も訪れています。しかも昔の写真と現在の写真を比較し、「昔はこうだった」と記憶をたどる。

単に「自転車が好き」というより、峠そのものに強い愛着を持っている人だと思います。

2026 年の新年の記事でも、毎年最初の峠越えを七草峠から始め、「今年はどんな峠が待っているのだろう」と考えています。しかもその七草峠は、本人も「誰も気にしていかない、目立たぬ峠」と書いているような場所です。

有名だから好きなのではなく、**「峠だから好き」**なんですね。

2. 「物好き」だけれど、かなり几帳面

一見すると、かなり行き当たりばつたりの人にも見えます。

例えば暗峠では、午後 3 時過ぎに駅を出発して、「これから峠を越えて宿まで行くのだが、果たして間に合うだろうか？」と書いています。ところが、その一方で標高差や距離から平均勾配を計算している。暗峠は平均 15% 以上と具体的に算出しています。

つまり、「行ってみよう！」という衝動派なのに、走り始めると妙に細かい。この両面性があります。

走行距離、標高、時間、ルート、装備などを記録する一方で、途中で予定が変わったり、宿を飛び込みで決めたりもする。

1982 年の地藏峠では、走った後に「さて、どこに泊まるかな？」と考えて飛び込みで民宿に泊まっています。

几帳面けれど、杓子定規ではない。そんな印象です。

3. 「苦しいこと」を楽しめる人

ここが人物像として一番面白いところです。

大上峠では、寒さで体が温まらず、雪が降り、ガスの火力も弱く、下りも寒い。それでも途中で焚き火を見つけると「すかさず暖まりに行く」。そして最後には「もういいです。早く駅に行きましょう」となる。

つまり、苦行を美化するタイプではありません。

辛いものは辛い。寒ければ寒い。雨なら雨を恨む。

でも、後から振り返ると、それも含めて「いいツーリングだった」となる。

実際、サイトの読者からも「焦りや疲れ、アクシデント、雨への恨み」まで含めた文章が魅力だと評されています。管理人自身も、それを「実際に走った者でしかわからない感動、辛さ、喜び」と受け止めています。

これはかなり体験至上主義の人だと思います。

4. 昔のものへの愛着が非常に強い

管理人の人物像を考えるうえで、「古いものが好き」はかなり重要です。

古い自転車、ランドナー、昔のサイクリング雑誌、古い峠道、旧街道、昔の写真……。

例えば 1977 年の『ニューサイクリング』の表紙を「サイクリストのバイブル」として取り上げ、それを見て峠に憧れた世代として自分自身の経験を重ねています。さらに 1980 年の自分自身の写真を掲載して、「若かりし頃、ハンチングに一眼レフ」と振り返っています。この人にとって自転車は、単なる移動手段でもスポーツ用品でもなく、「自分の人生の記憶を保存してくれる道具」なのではないでしょうか。

5. 機材好きだけれど、「最新機材」にはあまり興味がない

これは現在の自転車趣味とかなり違います。

サイトに出てくるのは、古いランドナーや TOEI など。2018 年の記事では参加者の自転車を一台ずつ紹介していて、「築 40 年のトーエイ、一生もの」といった表現も出てきます。

つまり、「最新のロードバイクで何グラム軽量化した」という方向ではなく、

「この自転車で、この道を何十年も走ってきた」という価値観です。

自転車を「消費するもの」ではなく、一緒に旅をする相棒として見ている感じがあります。

6. 仲間をかなり大切にする

一人で黙々と走るだけの人でもありません。

ツーリングの記事には仲間が頻繁に登場します。しかも単に「6 人で走りました」ではなく、誰がどんな自転車に乗っているのか、誰が健脚なのか、誰がパンク修理の名人なのか、といった具合に一人一人を覚えています。

そして野麦峠で偶然出会った読者とのエピソードは、かなり感情が表れています。

読者から「10 年くらい見ている」「自転車人生の指南書のような存在」とメールをもらい、管理人は「感動し涙するほどでした」と書いています。これは、かなり情に厚い人だと思います。

普段の文章は軽妙で、冗談も多い。でも、自分の好きなものを理解してくれる人が現れると、ものすごく嬉しい。

7. 実はかなりロマンチスト

これもサイトを読み込むと見えてきます。

例えば峠について、「峠が待っていてくれた」というような擬人的な表現をします。

また昔の峠を再訪すると、単に道路状況を比較するだけではなく、

「昔の自分がここを走った」という時間の重なりを楽しんでいます。

1980 年に走った峠を 38 年後に再び走る、という経験を淡々と記録しながら、その裏には「昔の自分に会いに行く」ような感覚があります。だから私は、管理人の根っこにはかなり強いノスタルジーとロマンがあると思います。

8. ただし、ナルシストではない

ここが面白いところです。これだけ長期間、自分のツーリングを記録していると、普通なら「俺はこんなところまで走った」という武勇伝になりそうです。ところが、このサイトではむしろ、

「寒い」「疲れた」「失敗した」「迷った」「もう帰りたい」といった部分も普通に出てきます。

なので、自慢するために走っている人ではないと思います。

「すごいでしょ？」ではなく、「こんなところ走ってきたんですよ。いやー、疲れましたよ（笑）」
という感じ。この距離感がサイトの親しみやすさにつながっています。

まとめると

私が「峠への招待」の文章から受ける管理人像を並べると、

根っからの峠好き

かなり行動力がある

古い自転車・ランドナー文化への愛着が強い

昔の雑誌や本を大切に使う

記録魔で、意外と几帳面

一方で旅先では結構行き当たりばったり

苦労や失敗も含めて旅を楽しむ

仲間や読者との縁を大切に使う

情に厚い

かなりのノスタルジスト

自転車を「趣味」以上に人生の一部としている

でも自分をあまり格好良く見せようとはしない

という人物に見えます。

そして一番端的に表現するなら、

「昭和のツーリング文化を身体で知っている、頑固なところのある少年のような人」

でしょうか。

特に興味深いのは、1980年代の若い頃の自分と、現在の自分が、サイトの中で同じ「サイクリスト」としてつながっていることです。1980年の嶺方峠、1982年の地藏峠、1988年の大上峠、そして現在の峠越えが全部同じサイトに並んでいる。その意味では「峠への招待」は、単なるツーリング記録というより、**一人の人が40年以上かけて作ってきた「自転車人生の私史」**として読むと、かなり面白いサイトだと思います。